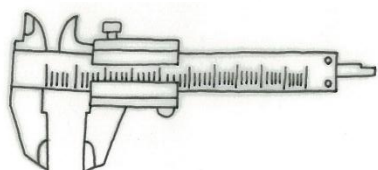
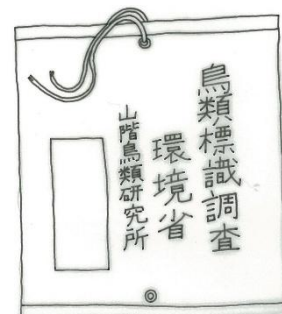
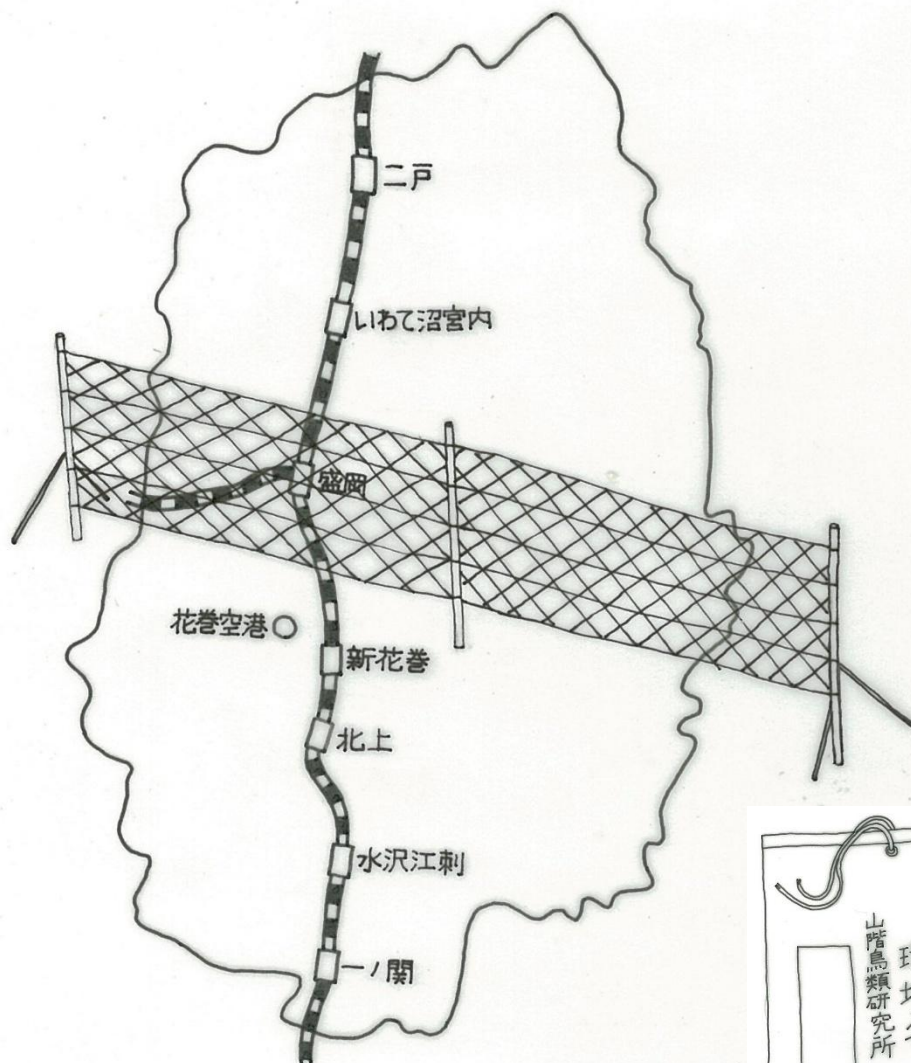
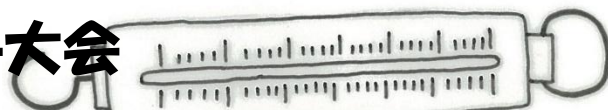


第39回 日本鳥類標識協会全国大会

岩手大会 講演要旨集



2025年11月8日～9日

いわて県民情報交流センター アイーナ

日本鳥類標識協会 第 39 回全国大会（岩手大会）
大会日程・会場案内

1. 大会日程 2025 年 11 月 8 日（土）・9 日（日）

2. スケジュール

11 月 8 日 13:50～16:30 公開シンポジウム「鳥を調べ、鳥に学ぶ」

いわて県民情報交流センター（アイーナ）804 会議場

13:20 開場

13:50 開会・あいさつ（日本鳥類標識協会会長 尾崎清明）

14:00～14:40 下北半島のイヌカサシの形態と生態－

三上かつら（NPO 法人バードリサーチ）

14:40～15:10 1966 年から 2024 年までの標識調査からわかるウミネコの年齢や移動について

成田 章（ウミネコ繁殖地燕島を守る会（青森県立八戸聾学校））

15:10～15:20 休憩

15:20～15:50 鳥についての変な虫：シラミバエの生態と病原体保有状況について

菅澤颯人（岩手大学獣医学部）

15:50～16:20 個体標識から分かったオオセッカや草原棲小鳥類の生態

高橋雅雄（岩手県立博物館）

16:20～16:30 閉会・あいさつ（岩手大会実行委員長 関川 實）

18:00～20:00 懇親会

盛岡地域交流センター（マリオス）4 階レストラン「ジューグリート」

11 月 9 日 一般口頭発表、総会、ミニエキスカージョン

いわて県民情報交流センター（アイーナ）501 会議室

8:50 開場

9:00 開会

9:05～10:45 口頭発表（7 題×14 分）

10:45～10:55 休憩

10:55～12:20 口頭発表（6 題×14 分）

12:20～13:20 総会

13:20～13:30 閉会・写真撮影

15:00～17:00 ミニエキスカージョン（希望者のみ。入退出自由）

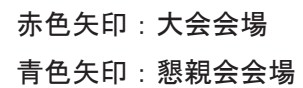
滝沢 2 級ステーション雫石川調査地見学

①大会会場 いわて県民情報交流センター（アイーナ）

11/8 午後 アイーナ 804 会議場

※ 501 会議室は総会終了後も 14:30 まで利用できます。室内で飲食も可能ですので、休憩や昼食などにご利用ください（ごみはお持ち帰りください。ごみ箱は各フロアのエレベーター付近にございます）。

(岩手県盛岡市盛岡駅西通2丁目9番1号)



いわて県民情報交流センター（アイーナ） フロアマップ



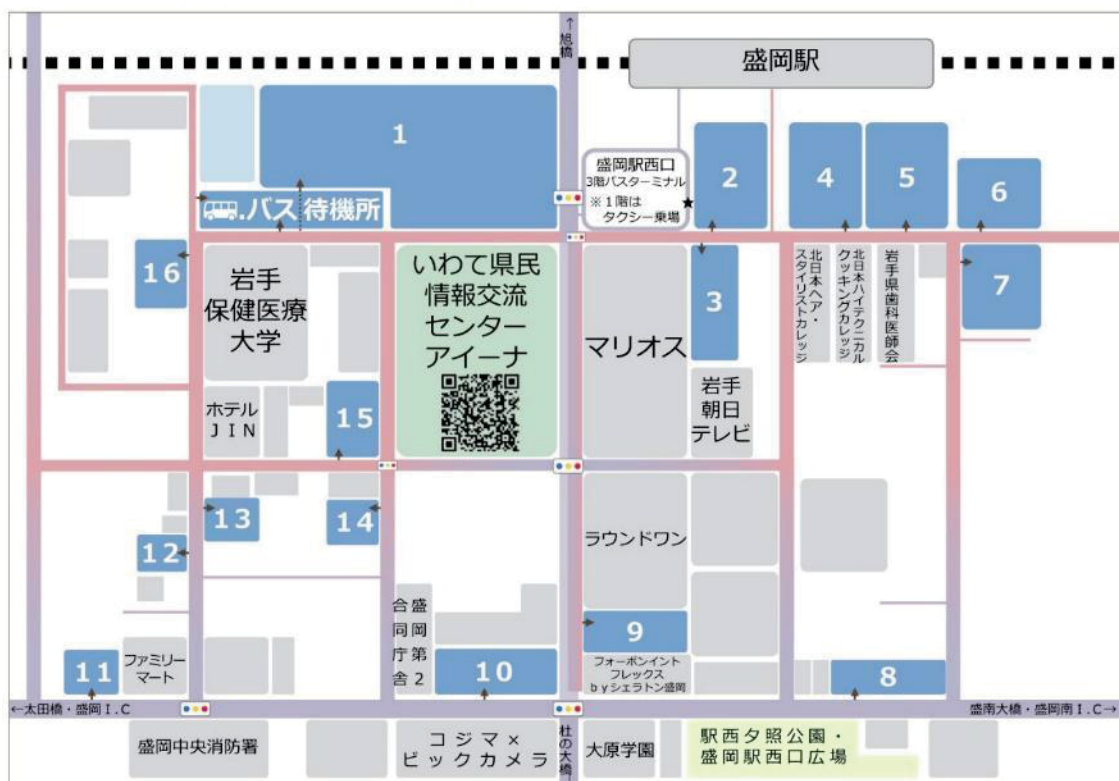
8F 804 会議場（11/8 午後）



5F 501 会議室（11/9 午前・午後）

アイーナ周辺駐車場MAP

aiina いわて県民情報交流センター
アイーナ



- | | |
|------------------------------------|----------------------|
| 1. 盛岡駅西口地区駐車場
(一般社団法人 盛岡市駐車場公社) | 9. タイムズ 盛岡駅西通第2 |
| 2. タイムズ 盛岡駅西口 | 10. 三井のリパーク 盛岡駅西通1丁目 |
| 3. マリオス立体駐車場 | 11. ザ・パーク 盛岡駅西通2 |
| 4. タイムズ フェザン西口 | 12. 駅西通1丁目駐車場 |
| 5. 三井のリパーク
盛岡駅西口立体駐車場 | 13. 日本パーク 盛岡駅西通 |
| 6. パラカ 盛岡駅西通第1 | 14. 三井のリパーク 盛岡駅西口第2 |
| 7. ザ・パーク 盛岡駅西通 | 15. 三井のリパーク 盛岡駅西口 |
| 8. 駅西パーク | 16. タイムズ 盛岡駅西通 |

JR盛岡駅前観光・貸切バス駐車場(バス待機場/公益社団法人 岩手県バス協会)

窓口は「3F盛岡駅西口バスターミナル 待合案内所・事務所」です。(地図の★マーク)
バスや大型車両の駐車場となります。

- ・ 周辺商業施設への駐車はご遠慮ください
- ・ 記載内容が変更になっている場合があります
- ・ ご利用時は各駐車場の表記をご確認ください

2025.5改定

1.盛岡駅西口地区駐車場

TEL	019-621-5107(7時～22時)			
料金				台数
時間	料金	最大料金		
7時 ～ 18時	30分 ¥100-	¥1,000-	459 台	
18時 ～ 23時	60分 ¥100-		 10台	
23時 ～ 7時	60分 ¥80-			
18時 ～ 7時		¥800-		

2.タイムズ 盛岡駅西口

TEL	0120-77-8924		
料金			台数
時間	料金	最大料金	
入庫後	20分 無料		55 台
0時 ～ 24時	40分 ￥200-	￥1,000-	
18時 ～ 8時		￥600-	

3.マリオス立体駐車場

TEL	019-621-5107(7時～22時)			
料金				台数
時間	料金	最大料金		
7時 ～ 18時	30分 ¥100-	¥1,000-		294 台
18時 ～ 22時	60分 ¥100-			
22時 ～ 7時	60分 ¥80-			
18時 ～ 7時		¥800-		
営業時間 7時～22時(営業時間外の入出庫不可)				

4.タイムズ フェザン西口

TEL	0120-77-8924			
料金				台数
時間	料金		最大料金	
0時 ~ 24時	40分	¥200-	¥900-	136 台

5.三井のリパーク 盛岡駅西口立体駐車場

TEL	0120-115-076			
料金				台数
時間	料金		最大料金	
0時 ～ 24時	60分	¥200-	¥900-	62 台

6.バラカ 盛岡駅西通第1

TEL	0120-100-608		
料金			台数
時間	料金	最大料金	
入庫後	60分	¥100-	21 台
入庫後24時間		¥500～ 700-	
17時 ～ 8時		¥300-	
※駐車番号によって最大料金が異なります。			

7.ザ・パーク 盛岡駅西通

TEL	019-625-0115			
料金				台数
時間	料金		最大料金	
0時 ～ 24時	30分	¥100-	¥700-	18 台

8.駅西パーク

TEL	019-647-9933				
料金					台数
時間	料金		最大料金		
7時 ～ 20時	60分	¥100-	¥600-	64 台	
20時 ～ 7時	60分	¥100-	¥300-		

9.タイムズ 盛岡駅西通第2

TEL	0120-77-8924				
料金					台数
時間		料金	最大料金		
0時 ~ 24時		60分 ¥200-	¥800-		57 台

10.三井のリパーク 盛岡駅西通1丁目

TEL	0120-115-076				
料金					台数
時間		料金	最大料金		
0時 ~ 24時		30分 ¥100-	¥800-		22 台

11.ザ・パーク 盛岡駅西通2

TEL	019-625-0115			
料金				台数
時間		料金	最大料金	
0時 ~ 24時	30分	¥100-	¥900-	8 台
入庫後12時間		¥700-		

12.駅西通1丁目駐車場

TEL	019-625-8413			
料金				台数
時間	料金		最大料金	
0時 ~ 24時	60分	¥100-	¥800-	11 台
入庫後12時間		¥600-		

13.日本パーク 盛岡駅西通

TEL	090-3123-4739			
料金				台数
時間	料金		最大料金	
0時 ~ 24時	60分	¥100-		18 台
6時 ~ 20時			¥600-	
20時 ~ 6時			¥100-	

14.三井のリパーク 盛岡駅西口第2

TEL	0120-115-076			
料金				台数
時間	料金	最大料金		
0時 ～ 24時	60分 ¥200-	¥800-	24 台	
20時 ～ 6時		¥100-		

15.三井のリパーク 盛岡駅西口

TEL	0120-115-076			
料金				台数
時間	料金		最大料金	
0時 ~ 24時	60分	¥200-	¥900-	39 台
20時 ~ 8時			¥500-	

16.タイムズ 盛岡駅西通

TEL	0120-77-8924			
料金				台数
時間	料金	最大料金		
0時 ~ 24時	40分 ¥200-			11 台
入庫後12時間		¥800-		

JR盛岡駅前観光・貸切バス駐車場

TEL	019-652-3118		
料金			台数
時間	料金	最大料金	
7時 ～ 20時		¥800-	11 台
20時 ～ 7時		¥2,500-	
20時～7時を超えた場合		¥3,000-	

第 39 回日本鳥類標識協会全国大会（岩手大会）開催記念 公開シンポジウム「鳥を調べ、鳥に学ぶ」開催趣旨

鳥類の生態や行動、進化などを調べる際に、鳥類を捕獲・標識して初めて分かることがたくさんあります。岩手県盛岡市での日本鳥類標識協会の全国大会開催を契機として、鳥を調べる面白さや興味深さを一般の方々に広くお伝えする場を作ることができたらと考えます。無料公開のシンポジウムとしてできるだけ多くの方々にご参加いただき、演者の方々には調査研究を分かりやすくお話いただけたらと思います。

《 公開シンポジウム後援団体 》

青森自然誌研究会、秋田自然史研究会、岩手県立博物館、岩手生態学ネットワーク、環境省東北地方環境事務所、公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団、自然観察指導員ネットワーク岩手、東北鳥類研究所、特定非営利活動法人おおせつからんど、日本野鳥の会青森県支部、日本野鳥の会秋田県支部、日本野鳥の会北上支部、日本野鳥の会弘前支部、日本野鳥の会もりおか、日本野鳥の会宮城県支部、日本野鳥の会宮古支部

本シンポジウムは一般社団法人日本鳥学会の津戸基金から助成を受けています。

《 講演者プロフィール 》

三上かつら（みかみ かつら） NPO 法人バードリサーチ

1975 年宮崎県生まれ。九州大学大学院にてシジュウカラのつがい外婚（浮気）の研究で博士（理学）を取得。鳥がどこにいるのか、そしてなぜそこにいるのかを地図化と行動観察に基づいて考察する手法をメインに、リュウキュウサンショウクイの分布やイスカ、カラ類の研究などを行っている。



成田 章（なりた あきら） ウミネコ繁殖地蕪島を守る会（青森県立八戸聾学校）

1969 年青森県八戸市生まれ。1978 年より、父憲一が蕪島でウミネコの生態調査や標識調査を行っていたことをきっかけに調査の手伝いを始める。上越教育大学動物生態学研究室で主に鳥類生態について学び、ウミネコの研究を開始する。教育学修士。1994 年より青森県内の特別支援学校に教諭として勤務。1995 年に「ウミネコ *Larus crassirostris* の種内托卵の新戦術」で日本鳥学会奨学賞受賞。2013 年に蕪島でのウミネコの生態解明や保護活動が認められ、三陸復興国立公園（種差海岸・階上岳地域）功労者受賞。2018 年に蕪島でのウミネコの生態解明に基づいた保護活動が認められ、第 72 回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」環境省自然環境局長賞受賞。2023 年より青森県立八戸聾学校教頭。



主な役職：ウミネコ繁殖地蕪島を守る会相談役、蕪島ウミネコ繁殖地保存活用計画検討会議委員、八戸市環境審議会委員、NPO 法人鮫町蕪島ウミネコ village 理事、はちのへ小さな浜の会理事、青森自然誌研究会評議員



菅澤颯人（すがさわ はやと） 岩手大学大学院獣医学研究科
1997 年大阪府生まれ。日本大学獣医学科を卒業後、岩手大学大学院に進学。大学の大掃除の際に、誰からも相手にされないシラミバエと出会う。以来、シラミバエと鳥類の関係や、シラミバエの病原体媒介者としての役割に興味を抱き、現在、獣医寄生虫学研究室の博士課程に在籍し国内におけるシラミバエの生態や病原体保有状況を調べている。

高橋雅雄（たかはし まさお） 岩手県立博物館

1982 年青森県八戸市生まれ、金沢大学でケリの繁殖生態と防衛行動について、立教大学でオオセッカの繁殖生態について研究し、2013 年に立教大学理学研究科で博士（理学）を取得。新潟大学・弘前大学・日本学術振興会等を経て、2020 年より岩手県立博物館の脊椎動物担当学芸員を務めている。



《 公開シンポジウム講演要旨 》

下北半島のイスカー—その形態と生態—

三上かつら（NPO 法人バードリサーチ）

イスカ *Loxia curvirostra* は、北半球の広い地域に分布する小鳥で、鮮やかな赤や黄色の体色と、上下のかみ合わせが互い違いになった独特のくちばし（写真 1）が特徴である。体形はずんぐりとして力強く、小鳥としてはがっしりとした顔つきをしており、そのくちばしを巧みに使ってまつぼっくりをこじ開け、種子を取り出して食べるという、まさにスペシャリスト的な生活を送っている。日本の多くの地域では冬鳥として群れで飛来するが、青森県など一部の地域では繁殖個体群も確認されている。本講演では、イスカの形態的特徴、なかでも他の鳥には見られないくちばしの構造が、どのようにイスカの生活と深く関わっているのかを紹介する。

下北半島で繁殖するイスカは、冬に松林で巣を造り、寒さが厳しい環境（写真 2）であるにもかかわらずヒナを育てる。その理由についてはまだまだ未解明の部分も多いが、その繁殖生態の一端にも触れる。また、本種は図鑑などで「赤い個体がオス」と説明されることが多いが、実際には赤から黄色まで多様な色彩パターンが見られる。そうした個体差の実例や、くちばしがまつぼっくり以外の餌を扱う際にどのように使われているかについても紹介する。



写真 1

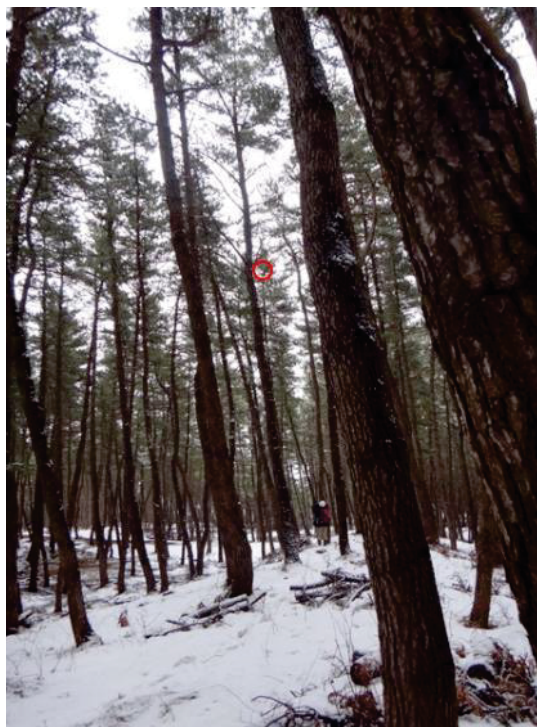


写真 2

1966 年から 2024 年までの標識調査からわかるウミネコの年齢や移動について

成田章（ウミネコ繁殖地蕪島を守る会（青森県立八戸聾学校））

青森県八戸市の蕪島でのウミネコの標識調査は、1927 (昭和 2) 年から行われ、1943 年～1960 年は中断したが、1961 (昭和 36) 年から再開し現在まで続いている。標識調査は 5 月と 6 月に行い、5 月は足環の付いた成鳥を再捕獲している。例年 130 羽程度を捕獲し、足環番号を読み、身体計測を行っている。6 月は巣立ち前の雛 2,000 羽に足環を付けている。1966 年から 2024 年までの標識数は 10 万羽を超えている。

標識調査によりウミネコの年齢と移動経路が明らかになっている。2024 (令和 6) 年は成鳥 123 羽を捕獲し、年齢を調べたところ、3 歳から 27 歳までのウミネコがいて平均年齢は 13.5 歳であった。2007 年 5 月には 32 歳 10 カ月のウミネコが再捕獲され、この年齢がウミネコの最高齢である。標識鳥回収記録を分析すると、繁殖を終えて蕪島を去った大半のウミネコは、8 月から 10 月頃は釧路沖や根室沖へ北上し、その後は南下し 12 月から 2 月頃は茨城や千葉、神奈川の海岸へ移動している。また、一部のウミネコは津軽海峡を通り、12 月から 2 月頃に新潟や、富山、石川の海岸へも移動している。海外では、ロシアのサハリン、フィリピンのルソン島、中国の上海や韓国の釜山で報告されている。この他に 2021 年に蕪島から約 10km 離れた八戸市大久喜の弁天島に繁殖している足環の付いたウミネコ 16 羽を再捕獲し足環番号を調べたところ、16 羽全てが蕪島で標識された個体であり、蕪島生まれのウミネコが弁天島へ移動して繁殖していることが明らかになっている。

蕪島では 60 年以上かけて 10 万羽以上のウミネコの雛に足環を付けているが、足環番号が読み取られているのは 1 割程度である。標識調査と GPS ロガー調査を組み合わせることで、年齢や移動についてさらに明らかになることが期待される。蕪島でのウミネコの標識調査は、あと 2 年で調査開始から 100 年を迎える。今後も標識調査が継続して行われるよう、ウミネコの生態調査や保護に関わる人たちと連携を図っていきたい。



ウミネコ写真提供：蛸名純一氏

鳥についでる変な虫：シラミバエの生態と病原体保有状況について

菅澤颯人（岩手大学獣医学部）

鳥の捕獲調査をしていると、鳥に付いている、まるでハエを潰したかの様に平らで体表面を素早く動く変な虫，“シラミバエ”に出会いませんか（図1）。一見、シラミなのかハエなのか分からない名前をしています，シラミバエはハエの仲間に属する昆虫で，日本を含む世界中に分布し，主に鳥類の体表に寄生します．しかし，体表に寄生しているため，捕獲や観察することが難しく，その分布状況などの生態は一部の種でしか分かっていません．



図1：マツムラトリ
シラミバエ

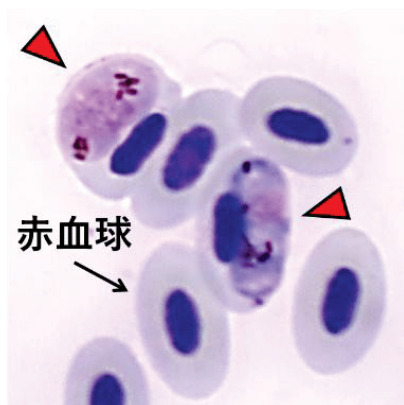


図2：鳥類の住血原虫
矢尻：原虫像

また，彼らの食事は血液であり，雌雄共に吸血します．

しかし，吸血するだけなら良いのですが，ときにシラミバエは吸血時に寄生相手へ迷惑

な“置き土産”をします．それは，鳥類の血液に寄生する住血原虫です（図2）．この原虫は鳥に広く感染していますが，一般に害はありません．しかし，鳥との相性によっては有害になることがあり，例えば飼育鳥に致死的な影響を与えます．そのため，感染サイクルなどの解明は飼育鳥の健康管理にとって重要ですが，国内のシラミバエがどのような住血原虫を保有してい

るかは全く不明です．

本講演では，私が千葉県立中央博物館で調査した結果を元に，シラミバエの季節消長，日周性，住血原虫保有状況など，シラミバエの生態と鳥類の住血原虫について発表をさせて頂きます．

個体標識から分かったオオセッカや草原棲小鳥類の生態

高橋雅雄（岩手県立博物館）

演者は青森県三沢市の仏沼にて、2007-2009 年の繁殖期にオオセッカのオス計 139 個体・メス計 102 個体を捕獲・計測・色足輪標識して個体識別し、経過観察から各個体の配偶形態や繁殖成績、なわばりの面積や環境などを記録した。その結果、3年間でオス計209 個体・250 巣を観察し、一夫多妻制の出現頻度や成立条件、隣接なわばりのオスによる子殺しの発生条件などを明らかにした。また、14 巣の巣内ヒナ 64 個体について標識して繰り返し計測し、その成長様式を明らかにして、外部形態と体サイズから日齢推定ができるようにした。

さらに、青森県八戸市市川地区の農耕地にて、2016 年にオオセッカのオス 20 個体と巣内ヒナ 62 個体を捕獲・標識し、翌年から 2025 年にかけてオス計 98 個体を捕獲・標識して、標識オス成鳥の帰還率を 33% (53/159)、標識オスヒナの帰還率を 30% (8/27) と推定した。なお、巣内ヒナは DNA から性判別し、確実に目視確認できるオスのみを帰還率の算出に用いた。同様に 2019-2024 年にコヨシキリのオス計 48 個体を、2019-2022 年にオオヨシキリのオス計 51 個体を捕獲標識し、その帰還率を 43% (29/68) および 47% (40/85) と推定した。同じく岩手県盛岡市の高松公園にて 2021 年よりオオヨシキリのオス計 14 個体を捕獲標識し、その帰還率を 57% (13/23) と推定した。これらの結果から、オオセッカ（国内越冬）はコヨシキリ（中国南部で越冬）やオオヨシキリ（東南アジアで越冬）と比較して帰還率が低いことが明らかとなった。



一般口頭発表

口頭発表の発表時間は1題当たり14分です。10分で予鈴、12分で本鈴、14分で終鈴が鳴ります。スケジュールの円滑な進行にご協力をお願いいたします。

1. 同所的に繁殖するセンニュウ類2種の帰還状況の比較
岩崎美穂・白岩 颯・高木昌興
2. ニュウナイスズメの攻撃性と繁殖生態
佐々木未悠・高橋雅雄・蛭名純一・東 信行・沓掛展之
3. 関東地方における冬期のヤマシギの日中ねぐら
小田谷嘉弥・稲村優一
4. 研究者と共同調査をやってみた カッコウ編 その2
深井宣男・飯田知彦・渡辺伸一・青木大輔・吉田邦雄
5. 標識回収記録から判明したアオジの渡り
仲村 昇
6. 禽舎型浸水ファネルトラップ: swim in trap の試用例
高橋佑亮・大田和朋紀・澤田政秀・今竹翔一朗
7. 長年の鳥類標識調査情報は地域の鳥類保護のための宝の山
須川 恒
8. WRP による年齢記録実践編～僕らは換羽を知らない～
細谷 淳
9. クロツグミ第一回冬羽個体の翼羽に見られる幼羽後換羽傾向
川路則友
10. アムールムシクイ *Phylloscopus tenellipes* の確実な標識記録および
エゾムシクイ *P. borealoides* との識別可能性に関する報告
大槻恒介・江寄真南・知花峻輝
11. 茨城県神栖市におけるオオセッカの標識調査
望月通人・阿子島大輔・小田谷嘉弥
12. 池間鳥獣保護区における鳥類標識調査について
浜地 歩
13. 大学のキャンパスや演習林での標識調査の試み
田谷昌仁

同所的に繁殖するセンニュウ類 2 種の帰還状況の比較

○岩崎美穂¹・白岩 颯¹・高木昌興²

(1: 北海道大学大学院理学院、2: 北海道大学大学院理学研究院)

Helopsaltes 属は 6 種のセンニュウ類で構成される単系統群であるが、各種が形態形質、さえずり行動、繁殖環境の選好などは多様である。これらの違いが種分化の過程でどのように獲得されてきたのかは興味深い。しかし、本属はいずれの種も草木の影に隠れて生活するため、観察が困難であり、生態学研究は難しい。そこで我々は、北海道石狩地域でエゾセンニュウ *H. amnicola* とシマセンニュウ *H. ochotensis* の捕獲・再捕獲調査を行い、繁殖個体や幼鳥の帰還の状況を調べた。出生地や前年の繁殖場所への帰還率は種ごとの繁殖戦略と関係していると予想される。同じ場所への帰還は局所環境適応の観点、見知った環境での高い繁殖成功可能性などを保証する可能性がある。一方、異なる場所への分散は繁殖失敗の補償かもしれない。そこで、上記 2 種の帰還状況から繁殖戦略の違いについて検討していきたいと考えている。エゾセンニュウとシマセンニュウは、いずれも北海道に夏季に渡来し、同所的に繁殖する。前者は河畔林から人家横の林まで広い環境を用いるが、後者は限られたアシ原や牧草地を選好する。形態形質やさえずり行動も、両種間では大きく異なる。

捕獲調査は、北海道石狩川河口地域の、計 100 ha ほどの調査地で実施した。2 種共に、さえずりを確認した地点で同種のさえずりをプレイバックして誘引し、かすみ網で捕獲した。また、シマセンニュウの繁殖なわばりを多く含むアシ原内に作った網場（HTX 38 枚）で定期的に捕獲した。捕獲した個体は、足環による標識、性と齢の記録、形態計測を行なって放鳥した。以上の捕獲調査を 2020 年から 6 年間行い、エゾセンニュウは雄成鳥 88 個体と幼鳥 2 個体、シマセンニュウは雄成鳥 184 個体、雌成鳥 49 個体、幼鳥 50 個体を捕獲した。帰還率は 2024 年までに捕獲した個体のうち、2 年連続で再捕獲された個体の割合として算出した。

本発表では標識調査から分かった 2 種の帰還率について、両種の環境選択や形態計測値などから評価したい。

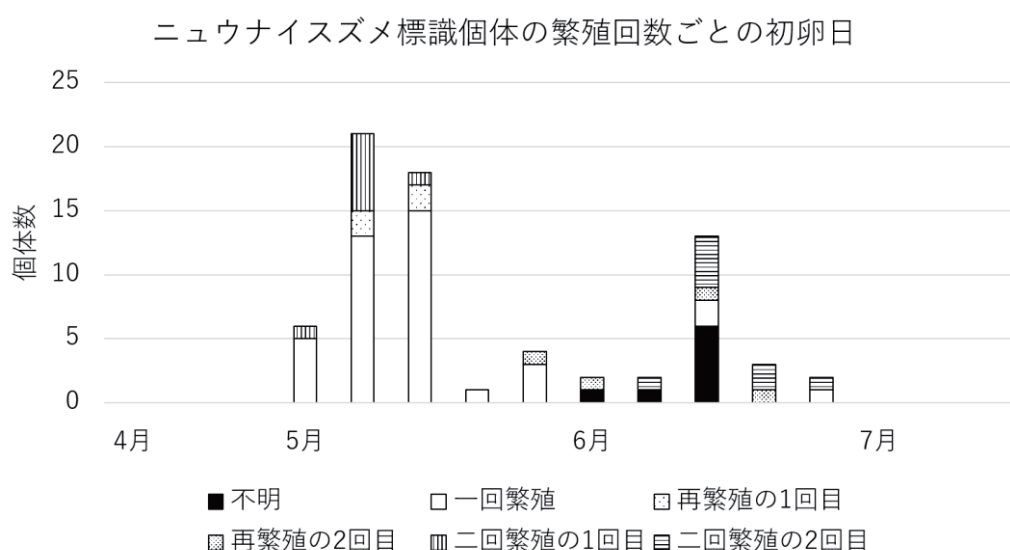
ニュウナイスズメの攻撃性と繁殖生態

○佐々木未悠（総合研究大学院大学）・高橋雅雄（岩手県立博物館）・蛭名純一（NPO 法人おおせっからんど）・東 信行（弘前大学）・沓掛展之（総合研究大学院大学）

鳥類における巣の **Aggressive defense** は子の生存率を高める重要な行動であるが、その種間差や決定要因は十分に解明されていない。本研究では、営巣場所が限られる樹洞二次利用者であり青森県三沢で同所的に繁殖するニュウナイスズメとスズメの攻撃性を比較した。その結果、ニュウナイスズメは巣箱への侵入者に対して強い攻撃性を示したが、スズメは無反応が多かった。この事象に対して、ニュウナイスズメは繁殖生態的に「一巣の価値が高い」ため、**Aggressive defense** を強く行うという仮説を立てた。スズメは留鳥で繁殖期が長く、個体が最大三回繁殖できる一方、渡りをするニュウナイスズメは繁殖ピークが二回しかない。さらにこれまでの研究では個体識別がされていなかったため、個体の繁殖回数、すなわち個体が実際に二回繁殖を行っているかは不明だった。

本研究では、2018～2021 年に青森県三沢市で巣箱を設置し、個体識別、巣のビデオ撮影、ルートをセンサスによりニュウナイスズメの繁殖行動を調査した。成鳥の捕獲には巣箱を用い、効率的な方法を編み出し実践した。

その結果、標識個体 61 羽（雄 32 羽・雌 29 羽）中 40 羽は年に一度のみ繁殖し、一度目の繁殖で失敗した再繁殖が 5 羽、二回繁殖が 8 羽、繁殖回数不明が 8 羽だった。二回繁殖をしている個体は初卵が比較的早かったが、早い個体 45 羽のうち 33 羽は一回繁殖だったこと、二回目のピークには、再繁殖と二回繁殖だけでなく、初卵が遅かった一回繁殖の個体も少なくとも 3 羽いることが分かった。以上より、ニュウナイスズメの多くは年に一度しか繁殖せず、これが **Aggressive defense** が強い生態学的理由と考えられた。



関東地方における冬期のヤマシギの日中ねぐら

○小田谷嘉弥（千葉県立中央博物館）・稲村優一（市立市川自然博物館）

ヤマシギ（チドリ目シギ科）は、越冬期には主に夜間に農地などで採食し、日中は林内でねぐらをとる。ねぐらの位置や環境は、狩猟鳥である本種の資源管理上重要な課題であるが、国内で追跡調査によって調査された例はほとんどない。本研究では、渡りの追跡研究を主目的として装着した発信器によって、関東地方の冬期におけるねぐらの位置や環境について明らかになったことを報告する。

2025 年 1 月 29 日から 3 月 7 日にかけて 6 個体のヤマシギを千葉県の農地で夜間に手捕りで捕獲し、GPS ロガー（Druid 社、ULTRAC4 P1050, 11g）を装着した。測位は 1 日 1 点、午前 9 時の位置情報を記録するように設定し、夜間の採食場所に戻ってきた際に、Bluetooth 通信によって遠隔でデータをダウンロードした。この作業は 4 月中旬まで、3 日に 1 回程度の頻度で調査地全体を巡回して行った。位置情報からねぐらの位置を特定し、現地調査または航空写真にてねぐら位置の環境を確認した。

6 個体の追跡期間は 0-53 日（ 32.8 ± 21.5 日（平均 $\pm$ 標準偏差））で、このうち 40 日以上追跡できた 4 個体は、それぞれ 3 月 18 日（2 個体）、3 月 21 日、4 月 5 日に終認となった。

5 個体の日中ねぐらを特定でき、これらは夜間の採食場所から 0.45-3.57 km (2.3 ± 1.1 km) の距離にあった。ねぐらの環境は雑木林、河畔林、林縁で、確認できた地点ではササ類などの下層植生が発達し、地上は比較的乾燥していた。40 日以上追跡できた 4 個体中 3 個体が複数のねぐらを利用しており、採食場所への距離の異なるねぐらを使い分けている個体がいる可能性が示唆された。2025 年秋に発信器を装着した個体が帰還すれば、日中のねぐらに一日中滞在しているかどうかについて、GPS の測位頻度を上げて詳しく調査したい。本研究は、公益財団法人中辻創智社研究助成による支援を受けた。

研究者と共同調査をやってみた カッコウ編 その2

○深井宣男¹・飯田知彦²・渡辺伸一²・青木大輔³・吉田邦雄¹

(1: 日本鳥類標識協会、2: 日本希少鳥類研究所、3: 森林総合研究所)

渡りをはじめとする鳥類の行動解析には様々な手法が用いられてきたが、その中でも近年、大きな成果をあげているのがロガーによる個体追跡である。ボランティアバンダーがロガーを利用した研究を実施するには、技術的にも経済的にも大きな壁があるが、両者がそれぞれ得意とする分野を相互補完的に協力することで、効率的により高度な調査研究をなす試みが各地で少しずつ実施され、成果が得られはじめている。演者らは昨年、栃木県の渡良瀬遊水地において、カッコウを対象とした共同調査を開始した。バンダーが研究者と連携して調査にあたることは、相互に大きなメリットがあることを実感できている。昨年は4個体、今年は5個体にデバイスを装着して追跡している。発信器の不調や予期せぬ故障などにより、全てが順調に追跡できているわけではないが、興味深いデータを確実に集積できている。あと数年、調査を継続できれば、渡り経路のみならず、繁殖地と越冬地での行動を詳細に把握できるだけのデータを得られる見込みである。今回は、今年の調査結果を基に、主に繁殖地での行動について発表する。

表. 各追跡個体の追跡日数と測位数

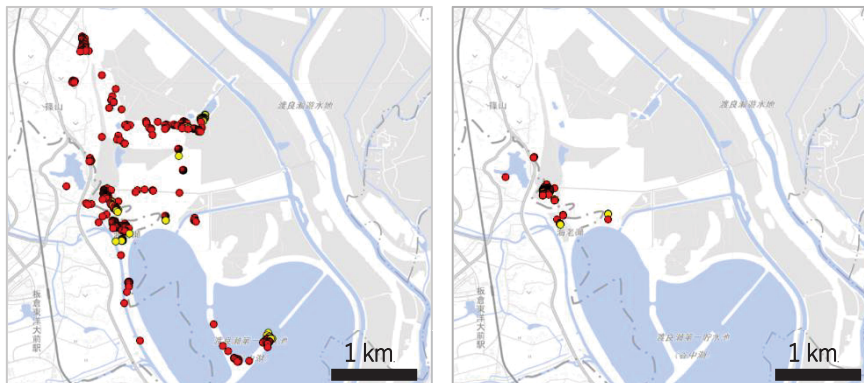
ID	性	機種	開始	最終受信	日数	測位数	備考
07CF	♂	Ultra	2024/05/25	2025/07/22	8	36	
05DF	♂	NANO	2024/05/26	2024/07/26	61	816	
0F30	♂	MINI	2024/06/22	2025/06/07	63	85	渡り追跡
0789	♀	Ultra	2024/05/25	2024/07/30	66	433	
0D9B	♂	NANO	2025/05/24	2025/08/12	81	1,380	
0DA5	♂	NANO	2025/06/07	2025/08/04	59	1,229	
0DA2	♂	NANO	2025/06/08	2025/08/05	59	943	
0CB2	♀	NANO	2025/05/24	2025/06/14	19	257	
0DA7	♀	NANO	2025/06/07	2025/07/06	30	695	

※送信方式 Ultra : 4G MINI : Argos NANO : Bluetooth

2024 年放鳥の
2 個体の帰還を
確認した

1 個体は越冬地
までの経路を
断続的に追跡
できた

受信方法の改
善で測位数が
向上した



渡去直前まで
追跡できた雄
の3個体は、繁
殖期の広い行
動圏が3週間
ほどの間、著
しく縮小した

風切を換羽し
ていた可能性
が考えられる

図. 繁殖後期(左)と渡去前(右)の行動圏の変化 (0D9B 雄成鳥)

標識回収記録から判明したアオジの渡り

仲村 昇（公益財団法人山階鳥類研究所）

日本で1961～2023年に標識放鳥された約651万羽のうち、アオジの累計放鳥数は約132万羽で最多である。3千件超の移動回収記録から判明したアオジの渡り経路を報告する。

道北にある浜頓別ステーションのアオジの累計放鳥数は約6万5千羽で、放鳥後数カ月以内に北海道西半分および本州日本海側を中心に九州南部まで回収記録が得られている。ただし、日本海側で最も西の回収記録は鳥取市であり、それよりも西の本州日本海側および九州北部での回収記録は無い。このため、大部分は兵庫県以東で日本海を離れて瀬戸内海および太平洋岸に移動していると考えられる。

道東にある風蓮湖ステーションのアオジの累計放鳥数は約12万3千羽で、根室支庁内の多くの調査地の放鳥数を加えると24万羽を超える。これらの地点からは、放鳥後数カ月以内に北海道南岸および本州太平洋側を中心に九州南部まで回収記録が得られている。北海道内では襟裳岬よりも西の地域での回収記録がほとんどないため、少なくとも数が襟裳岬周辺から本州北部太平洋岸に直行している可能性が示唆される。

また、浜頓別と風蓮湖のステーション間では回収記録は得られていない。

禽舎型浸水ファネルトラップ：swim in trap の試用例

○高橋佑亮^{1,2}・大田和朋紀¹・澤田政秀¹・今竹翔一郎¹

¹一般財団法人自然環境研究センター ²東北自然史研究会

日本におけるカモ類の主な捕獲方法（生け捕り）としては、かすみ網等の張り網、無双網、投げ網、手捕り等が挙げられる。一方、北米では誘引餌を用いたファネルトラップが主要な方法の一つとされ、水鳥バンディングマニュアルの多くの紙面を占めている。我々は swim in trap と呼ばれる禽舎型浸水ファネルトラップを試用し、カモ類等の水鳥の捕獲に成功した。日本では数少ないこのトラップの事例と考えられるため、試用経験を共有する。

swim in trap はその名の通り、カモ類等の水鳥が泳いで入り、逆行できず閉じ込められる仕組みのトラップである。箱状や円柱状のものがあるが、今回は北米水鳥バンディングマニュアルに掲載される Doug Benning が設計した幅 2.4m×奥行 2.4m×高さ 1.2m の箱状のものを採用し、金網や防鳥網等を用いて自作した。

トラップによる捕獲は、2024 年 10 月～2025 年 1 月に関東地方の 2 か所、調査地①②において実施した。はじめにトラップの前面半分を開放し、自由に出入り可能な状態で誘引餌を置いて馴致したのち（以下、馴致期間という）、開放部を金網で閉じて捕獲可能な状態にした（以下、稼働期間という）。

調査地①では、草原に囲まれた溜め池の水面に 1 基のトラップを設置した。馴致期間 14 日、稼働期間 48 日とし、餌の補給を 6 回行った。その結果、マガモ 4 羽、オオバン 5 羽、バン 3 羽（うち再捕獲 1 羽）、延べ 12 羽が捕獲された。調査地②では、湖岸の水面に 1 基のトラップを設置した。当地は地域住民らによる給餌が日常的に行われており、冬季には多数のオナガガモ等が集まる場所である。馴致期間 91 日、稼働期間 1 日とし、餌の補給を 5 回行った。その結果、オナガガモ 43 羽が捕獲された。

このトラップは、水鳥が中で自由に行動できるため体力の消耗が比較的少なく、水に浸っているかつ構造的には禽舎のため捕食者に襲われるリスクは小さい。水鳥が中に入ってから解放まで他の方法に比べれば時間的余裕があり、短期的な見回りの必要がないことは利点である。その反面、工作費、トラップをリモート監視するためのネットワークカメラ購入及び通信費、餌の補給や標識放鳥のための旅費等、比較的高額の費用がかかった。調査地②のように餌付いているカモ類等が集まる場所であれば一度に多数の捕獲が期待できるが、調査地①のような場所では散発的に少数の個体が捕獲される。このトラップは、水鳥の密度が高い水域に容易に通え、長期的に繰り返し捕獲を行う場合に適した捕獲方法と考えられた。

長年の鳥類標識調査情報は地域の鳥類保護のための宝の山

須川 恒(京都府鳥類 RDB 改訂分科会代表)

今年(2025 年)9 月 27 日 28 日京都府立植物園で開催された「きょうといきものフェス 2025」で「鳥類標識調査グループ・関西」名でブース展示した京都府の長期間の鳥類標識情報を俯瞰した内容を紹介する。展示内容としては、①鳥類標識調査とは何かの解説、②2002 年の初版から 10 年毎に改訂している京都府の RDB(レッドデータブック)改訂の紹介、③その中で 50 年間を越える京都府における鳥類標識調査の情報(山階保全第 32-162 号)の役割の 3 点である。

①鳥類標識調査とは何かの一般に向けての解説は、山階研からリーフレット「渡り鳥の不思議を調べてみよう」や、2024 年に出版された「足環をつけた鳥が教えてくれること」によっても容易になっている。鳥類標識調査の成果を示すインパクトある図は、京都府発着の「回収マップ」図である。

②生物多様性への一般や行政の関心はとて高くなっている。その背景には 2000 年頃から定期的(京都府では約 10 年毎)に改訂されている都道府県単位のレッドデータブックがある。鳥類でもその改訂作業をしていて、長期的なさまざまな情報をもとに、種別の個体数の規模と個体数の変化から希少性ランクを評価する。その中で長期的な鳥類標識情報は重要な情報源として活用できる可能性をもっている。

③京都府の 50 年弱(1971 年～2018 年)の全標識情報とりよせ、2021 年に鳥類の第 3 版レッドリスト改訂に役立てた。今回は京都府における 85 ヶ所の調査地のうち継続的調査(12 年～48 年)をしている 17 ヶ所の標識調査に注目した。この 17 ヶ所だけで、全標識個体数 182017 羽の 95%(173909 羽)となっている。これらの標識調査地の調査活動は中断している調査もあり、標識調査地目録の形で基本的情報の収集が課題となる(今回は大見・尾越の目録を紹介)。重要なことは、これら 17 ヶ所の調査地における種別標識数では、一般に得にくい希少種ランクが高い種の過去の記録が得られる点である。

WRP による年齢記録実践編～僕は換羽を知らない～

細谷 淳

標識調査でより正確な年齢記録を行うため、H・P システムに基づく WRP の導入が南北アメリカやオセアニアで進んでいる。WRP は地域・分類群を問わず同一の記録法を用いることができ、さらに日本の従来法が抱える問題を解決できる。

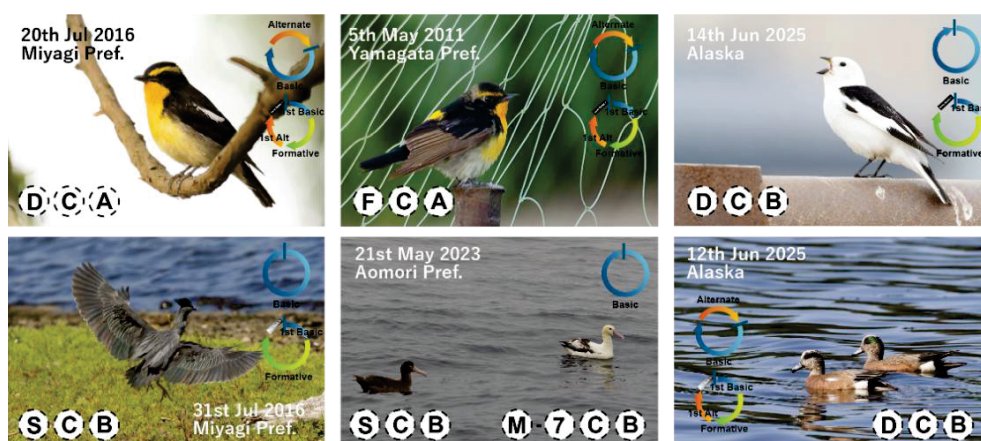
WRP は 3 文字のコードからなる。一文字目でサイクル (F=First、S=Second、D=Definitive など)、二文字目で換羽状態 (P=換羽中、C=換羽後)、三文字目で羽衣 (B=Basic、A=Alternate、F=Formative など) を記す。例えば第一回冬羽への換羽中は FPF、成鳥冬羽は DCB とする。

H・P の用語では、旧来の冬羽を Basic、夏羽を Alternate、第一回冬羽を Formative と呼ぶ。「羽衣」は換羽で得られる羽毛の集まりを指し、摩耗は考慮しない。つまり繁殖期の雄がどんなに美しくてもそれが換羽によらず摩耗で得られるものであれば、あくまで冬羽 (Basic) である。サイクルは Basic 換羽の始まりと次の Basic 換羽の始まりと定義されているため、毎年完全換羽を行わない大型の種や、サイクルが 1 年未満になる種がいたとしても WRP で記録できる。

補助コードとして H- (今季生まれ) と A- (前年に生まれた個体) があり、同じ FCF でも年を区別できる。これは春に換羽をしない種で 1S が使えない問題を解決するため、WRP 導入の動機の一つになる。M- (少なくとも) は幼羽後完全換羽を行うスズメ、メジロ、ウグイス、ヤブサメなどで利用ができ、FPF の後幼羽がなくなれば M-FCF と M-SPB を繰り返す。

年齢記録には頭骨骨化指標など換羽状態以外の要素も積極的に用いるべきだが、再捕獲で知りうる情報は統計処理の正確性のため使ってはならない。なお、どのようにして年齢を判別したかを記録することが望ましく日本のバンディングでの標準化が望まれる。

日本産鳥類の換羽情報は十分とはいえず、より多くの記録と解析が必要である。これまでも日本のバンダーによる優れた換羽研究が行われてきたが、WRP の導入を契機に、換羽への関心を持つバンダーが増え、日本産鳥類の換羽理解がさらに深まることを期待する。



クロツグミ第一回冬羽個体の翼羽に見られる幼羽後換羽傾向

川路則友（札幌市）

一般にツグミ類は、生まれた年の秋季に幼羽後部分換羽を行うため、初列および次列風切羽、初列雨覆羽だけでなく、大雨覆羽（GC）、手根雨覆羽（CC）、小翼羽（Al）、尾羽などが未換羽で残ることから、この時期での成幼判定は容易と言われる。演者は2023年度日本鳥類標識協会全国大会オンライン大会において、札幌市羊ヶ丘に設置した調査地で2020年～2023年の秋季（9～10月）に捕獲し、第一回冬羽（1W）獲得状態と判定したオスでは、GCやCCのすべて、Alの一部を換羽する個体が比較的多く見られることについて発表した。今回は2024年度の結果を加え、さらにメスのデータも含めて報告する。

調査地で2020～2024年秋季に捕獲したクロツグミのうち、オス1,222羽、メス713羽について翼羽の換羽状況を調べた。成鳥はオス126羽（全体の10.31%）、メス54羽（同7.57%）であった。1W個体のうち、1個体あたりの未換羽GCの平均枚数はオスで2.43、メスで2.23であり、顕著な雌雄差は認められなかった。また、オスの17.70%、メスの23.37%の個体ではGCのすべてを換羽していたが、GCの外側6枚を未換羽の状態に残した個体の一部で、すでにCCやAl最内側1枚が換羽している個体も確認された。一方、同時期に捕獲されたアカハラ、マミチャジナイ、およびシロハラの1W個体では、未換羽GC枚数の平均が6.75枚で、3枚以下の個体はまったく確認されなかったことから、クロツグミとは明らかに異なる傾向が認められた。北欧（Ottenby, Sweden）のクロウタドリでは、90%以上の個体で内側GCの4～8枚までの換羽（未換羽は3枚未満）が見られるとしているが、GCのすべてを換羽している個体は極めてまれ（約1%）と記述されている。札幌で捕獲されたクロツグミ1W個体の換羽傾向は、雌雄ともに、ツグミ類の中でもかなり特徴的と思われる。

**アムールムシクイ *Phylloscopus tenellipes* の確実な標識記録および
エゾムシクイ *P. borealoides* との識別可能性に関する報告**

○大槻恒介（長大院・水環）・江寄真南（鹿大院・獣医）・知花峻輝（長大院・総合生産）

アムールムシクイは、エゾムシクイと外部形態が酷似しており、インハンドでの識別は極めて困難である。茂田ら（2017）は、本種の国内初記録を報告し、初列風切の突出枚数などに 2 種間で差があるとしたが、各 2 個体の比較のため一般化は困難である。また遺伝子に基づく同定も行われていない。本報告では、遺伝子解析で同定されたアムールムシクイの標識記録を報告するとともに、放鳥時の地鳴きおよび計測値によるエゾムシクイとの識別の可能性を検討した。

2023～2025 年春に長崎県長崎市の樺島および権現山で調査を行い、捕獲したエゾムシクイ種群について計測・撮影・DNA 採取・地鳴きの録音を実施した。遺伝子サンプルを得た個体は mtDNA の COI 配列により種を同定した。録音データから最高・最低周波数、高速フーリエ変換で得たピーク周波数を算出し、k 平均法で 2 群の境界値を探索した。

結果、エゾムシクイ種群を 43 羽捕獲し、うち 8 羽について遺伝子解析を行い、4 羽がアムールムシクイと同定された。地鳴きはアムールムシクイの方が高く、境界値はピーク 5,121 Hz、最高 5,714 Hz、最低 4,805 Hz で、いずれでも判別結果は一致した。外部形態では翼長・嘴高・全長・体重・P6-P5・PP 長に差の可能性があったが、既報よりも値の重複が大きかった。尚、サンプルが少ないため統計的検定は行わなかった。

本調査により、国内でのアムールムシクイの確実な標識記録を得た。地鳴きの高さは識別に有効で、ピーク周波数は客観的に算出できる指標として有用である。Yap *et al.* (2014) および Hungdon *et al.* (2017) と本研究の最小値 (5,462 Hz) を併せて考慮すると、識別境界は約 5,300～5,400 Hz と考えられる。ピーク周波数の算出には手間を要するため、実務的には最高・最低周波数から種を判断するのも有効だと考えられる。以上より、放鳥時の鳴き声は識別に有効だが、鳴かない個体の識別は困難であるため、標識調査では原則エゾムシクイ上種と記録し、音声確認により種を確定させる運用が望ましい。

茨城県神栖市におけるオオセッカの標識調査

○望月通人¹・阿子島大輔¹・小田谷嘉弥^{1,2}

(1: 香取海鳥類標識調査グループ 2: 千葉県立中央博物館)

利根川下流域のヨシ原は、関東地方に残された大規模な湿性草地の一つであり、オオセッカやコジュリン、オオヨシキリ、コヨシキリ、セッカが繁殖し、ヨシ原に生息する鳥類の貴重な生息環境となっている。特に、国内希少野生動植物種に指定されるオオセッカの日本最大の生息地として知られている。オオセッカは、低層から中層のヨシ原を好むことから、限られた湿地環境にのみ生息する渡り鳥であり、繁殖期の雄を除いて潜行性が強く、その生息実態の把握が困難な種である。従来を目視による雄の囀り個体数調査では、個体群の詳細な性比・年齢構成や繁殖成績を把握することができないため、標識調査による直接捕獲が有効である。

当調査地では、1980年代および2008年頃に標識調査が行われていたが、それ以降約10年間にわたり小鳥の標識調査が途絶えていた。同様の規模と時期で調査を実施することにより、当地における数十年スケールのオオセッカの個体群変動を評価することが可能となる。長期的な標識調査により個体群動態を明らかにすることは、国内希少野生動植物種の保全施策における科学的根拠となり得る。

そこで、オオセッカ等の希少鳥類の生息状況及び繁殖状況のモニタリング等を目的として、2018年5月より茨城県神栖市のヨシ原において定期的な鳥類標識調査を開始した。また、2019年からは山階鳥類研究所の主導する繁殖モニタリング調査（日本版MAPS）に準拠して、繁殖時期である5～8月に月1～2回程度、かすみ網（HTX11枚）による捕獲調査を実施している。その結果、2025年までの7年間で計1025羽（再捕獲含む）のオオセッカを捕獲した。

本発表では、蓄積されたオオセッカの捕獲データから、個体群の年変動、性比・年齢構成の推移、繁殖成功率の経年変化などについて分析し、本調査地におけるオオセッカ個体群の特性と、今後の保全管理への示唆について報告する。

池間鳥獣保護区における鳥類標識調査について

浜地 歩（宮古野鳥の会・(株)プレック研究所/沖縄文化環境研究所）

沖縄県宮古島市の池間島に位置する池間湿原は、国指定池間鳥獣保護区に指定されている。当湿原は、沖縄県最大の淡水性の湿原でムラサキサギ（沖縄県 RDB：VU）やオオクイナ（環境省 RL：EN、沖縄県 RDB：EN、宮古島市条例保全種）の国内の繁殖北限となっているほか、渡り鳥にとっても重要な中継地となっている。

当地域では宮古野鳥の会により冬季の水鳥のカウントなどが実施されていたものの、鳥類標識調査については 2013 年に単発的な調査が実施されたのみで、定期的な調査は実施されていなかった。そこで、湿原等を利用する小鳥類を把握することを目的とし、当湿原内及び林縁環境で 2020 年秋から小規模ながら鳥類標識調査を開始した。

これまでウグイス、シロハラなど 53 種 646 羽を放鳥した。中にはシベリアセンニュウなど潜行性が高い種や、ズグロチャキンチョウ、ヤブヨシキリなど国内確認例が少ない種や、アカヒゲ（国指定天然記念物、国内希少野生動植物種、環境省 RL：VU、沖縄県 RDB：VU、宮古島市条例保全種）など希少種も含まれた。また、冬季にクロツグミ、エゾセンニュウ、シマセンニュウなども確認された。

鳥類標識調査と並行して定点調査等も実施しており、これらの結果から鳥類標識調査の特色等もあわせて示す。

本研究は、湿原の鳥類相の把握及び渡り鳥の動向把握に鳥類標識調査が寄与した例と考えられる。

本研究の一部は、環境省沖縄奄美自然環境事務所の平成 29 年度～令和 6 年度国指定池間湿原鳥獣保護区における鳥類調査業務により実施された。



大学のキャンパスや演習林での標識調査の試み

田谷昌仁（東北大学大学院生命科学研究科）

鳥類標識調査を実施する上で、網場の選定の際に重要となるのが、その土地の所有者や管理者の承諾を得ることである。しかし、民有地の場合はその土地の所有者を探すところから始めなければならず、その作業負担は大きい。さらに、自身の土地勘のない場所で調査を開始したい場合にはその障壁はさらに大きくなる。

これまで発表者は、東日本と九州地方に定着した外来鳥類ガビチョウの分子系統地理および進化生態学的研究を行ってきた。広い分布域で調査する必要があったため、数多くのバンダーの方々にご協力いただいて各地の網場を訪問して調査を実施した。しかし、それだけでは網羅できない地域もあったため、土地勘のない地域でガビチョウの生息する山林の網場を新たに選定する必要があった。

そこで発表者は、大学のキャンパスや演習林を利用することで、ガビチョウの生息地を網羅しつつ、民有地よりも土地所有者の把握と利用の承諾を簡便に得ることができると考えた。これまで、自身の所属する宮城県の東北大学川内キャンパスおよび植物園に加え、静岡県の大井町立樹芸研究所、福岡県の九州大学福岡演習林、宮崎県の九州大学宮崎演習林の3ヶ所で研究利用の申請を行い、鳥類標識調査を実施した（図）。今後も大学演習林を活用することで、ガビチョウの分布域をさらに網羅して調査を継続する予定である。本講演では、発表者による各キャンパスおよび演習林での標識調査の様子を紹介し、大学キャンパスや演習林で調査を行う利点や意義について議論する。

多くの大学演習林は、研究目的であれば学外者の利用も受け入れており、申請内容に基づいて利用の可否が判断される。発表者の利用した各演習林では、必ずしも大学関係者でなくとも、申請内容の科学的な意義や公共性が確かなものであれば受け入れられる余地があるように思えた。大学関係者以外による調査や研究にも、演習林は活用可能かもしれない。



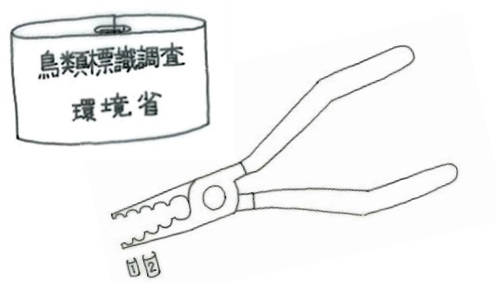
図 九州大学福岡演習林での鳥類標識調査の様子。

参加者名簿（五十音順）

No.	氏名		お住まい	懇親会 参加	シンポジ ウム講演	口頭発表
1	足利 英美	あしかが えみ	秋田県	○		
2	足利 直哉	あしかが なおや	秋田県	○		
3	東 信行	あずま のぶゆき	青森県	○		
4	安部 亮佑	あべ りょうすけ	北海道	○		
5	五百澤 日丸	いおざわ ひまる	新潟県	○		
6	池上 隆之	いけがみ たかゆき	北海道			
7	伊藤 一喜	いとう かずき	長崎県	○		
8	今村 知子	いまむら ともこ	茨城県	○		
9	岩崎 美穂	いわさき みほ	北海道	○		○
10	蛭名 純一	えびな じゅんいち	青森県	○		
11	大泉 龍太郎	おおいずみ りゅうたろう	北海道			
12	大嶋 康裕	おおしま やすひろ	青森県			
13	大槻 恒介	おおつき こうすけ	長崎県	○		○
14	小倉 豪	おぐら たけし	長野県	○		
15	尾崎 清明	おざき きよあき	茨城県	○		
16	小田谷 嘉弥	おだや よしや	千葉県	○		○
17	岡田 宣彦	かたおか のぶひこ	兵庫県	○		
18	金杉 尚紀	かなすぎ なおき	北海道	○		
19	亀谷 辰朗	かめや たつあき	千葉県	○		
20	川路 則友	かわじ のりとも	北海道	○		○
21	木下 徹	きのした とおる	新潟県	○		
22	久下 直哉	くげ なおや	大阪府	○		
23	久慈 敏	くじ さとし	岩手県	○		
24	熊倉 優太	くまくら ゆうた	青森県	○		
25	黒田 治男	くろだ はるお	兵庫県	○		
26	小林 めぐみ	こばやし めぐみ	北海道	○		
27	米田 重玄	こめだ しげもと	千葉県	○		
28	小山 和美	こやま かずみ	埼玉県	○		
29	小山 正人	こやま まさと	埼玉県	○		
30	齊藤 安行	さいとう やすゆき	茨城県	○		
31	作山 宗樹	さくやま むねき	岩手県	○		
32	佐々木 未悠	ささき みゆ	青森県	○		○
33	佐藤 賢二	さとう けんじ	宮城県	○		
34	菅澤 颯人	すがさわ はやと	岩手県	○	○	
35	須川 恒	すがわ ひさし	京都府	○		○
36	瀬ヶ沼 涼太	せがぬま りょうた	岩手県			
37	関川 實	せきかわ みのる	岩手県	○		
38	高木 昌興	たかぎ まさおき	北海道	○		
39	高橋 雅雄	たかはし まさお	岩手県	○	○	
40	高橋 佑亮	たかはし ゆうすけ	埼玉県			○
41	田谷 昌仁	たたに まさのり	宮城県	○		○
42	伊達 功	だて いさお	岩手県			
43	田中 智	たなか さとし	滋賀県	○		
44	中野 晃生	なかの あきお	東京都	○		
45	仲村 昇	なかむら のぼる	神奈川県	○		○
46	中村 豊	なかむら ゆたか	宮崎県	○		
47	成田 章	なりた あきら	青森県	○	○	
48	畠山 歩	はたけやま あゆみ	岩手県			
49	浜地 歩	はまち あゆむ	東京都	○		○
50	原山 法大	はらやま のりひろ	北海道	○		

参加者名簿（五十音順） 続き

No.	氏名	ふりがな	お住まい	懇親会 参加	シンポジ ウム講演	口頭発表
51	榛沢 日菜子	はんざわ ひなこ	北海道			
52	深井 宣男	ふかい のりお	群馬県	○		○
53	深井 真紀	ふかい まき	群馬県			
54	細谷 淳	ほそや じゅん	宮城県	○		○
55	松本 祥子	まつもと さきこ	千葉県	○		
56	三上 かつら	みかみ かつら	北海道	○	○	
57	溝口 文男	みぞぐち ふみお	鹿児島県	○		
58	村上 正志	むらかみ まさし	新潟県	○		
59	村上 真由美	むらかみ まゆみ	新潟県	○		
60	村田 野人	むらた のびと	岩手県	○		
61	望月 通人	もちづき みちと	埼玉県	○		○
62	山根 みどり	やまね みどり	兵庫県	○		
63	由井 正敏	ゆい まさとし	岩手県	○		



第 39 回日本鳥類標識協会 全国大会（岩手大会） 講演要旨集

編集・発行 第 39 回日本鳥類標識協会全国大会実行委員会

名誉委員長 由井正敏（岩手県立大学名誉教授/東北鳥類研究所所長）

実行委員長 関川 實（日本野鳥の会宮古支部支部長）

シンポジウム・アドバイザー 高橋雅雄（岩手県立博物館）

足利直哉（秋田県）、足利英美（秋田県）、東 信行（青森県）、熊倉優太（青森県）、
伊達 功（岩手県）、菅澤颯人（岩手県）、高橋佑亮（埼玉県）、村田野人（宮城県）、
久慈 敏（岩手県）、日本野鳥の会もりおか（米倉達夫、塚田浩子、藤原典子）

事務局 作山宗樹（岩手県）

Special thanks to：尾崎清明、澤 祐介、小林さやか、惣田彩可、須川 恒

発行日：2025 年 10 月 31 日

イラスト：足利直哉 講演要旨集編集：高橋佑亮

シンポジウムチラシデザイン：大野楽弥

シンポジウム写真提供：蛭名純一